

〈資料翻刻〉 永代美知代「デツカンシヨ」(1)

有元 伸子
板倉 大貴
ダルミ・カタリン
萬田 慶太
熊尾 紗耶

【解題】

本資料は、広島県上下町出身の女性作家・岡田（永代）美知代（一八八五—一九六八）の生前未発表原稿である。著者没後は原博己氏が保存し、上下町歴史文化資料館（現・府中市上下歴史文化資料館）に寄贈された。

コクヨのA4サイズの四百字詰め原稿用紙が使用されており、インクはブルー・ブラック。原稿用紙は二つ折にし、二穴を紙紐でまとめ、さらに三穴を紐でまとめた袋綴じである。原稿のページ番号は1から100までふられているが、85から92までの八枚が欠損したまま綴じられており、現存する原稿枚数は九二枚である。

翻字に当たっては、漢字を常用字体に改め、明らかな誤字もそのままとした。原稿には訂正箇所も多いが、いずれも最終本文を採った。なお、「」内の算用数字は原稿のページ番号、□は本文が空白でルビのみ振られている文字、■は判読不明字を示す。

本作品は（一）から（七）の七節からなるが、紙数の都合により、今号では前半の（一）から（四）（五二ページの四行目まで）を翻字した。後半（五）（七）の翻字と全体の注・解説は次号に掲載する予定である。

〔1〕 『デツカンシヨ』

（一）
激めしい鉄の扉を両側に開いた石門を入って、西洋館の横手から、日本建ての方へと曲りながら、万里子ときたやは話し続けた。

『そんなにお帰気になる事御座いません。きたやが受け合ひます。教会からのお帰りですもの。もう此のお時間で御座います。大丈夫、屹度お家に被入やいますよ』

『万里子、もう一つ、お汽車か、お電車待つてた方が、よかつたか知ら、ねえ、きたや』

『ずつとお待ちして居たちや御座いませんか。何かの行き違ひで御座います』

『行き違ひ？母様のお顔、見つからなかつたわね。万里子、解らないわ』

チリチリ、チリン！可憐らしいお鈴が鳴って、内玄関の格子戸が開いた。其の途端、急いで駆け出した仲働きのうらや、びつくり顔（2）で云つた。

『オヤ、万里子様。只今うらやが駅まで、おしらせに駆けつける処で

御座いました」

「母様からお電話？早く云つてよ」

「先刻お帰宅で御座います」

「きたや、きたやの勝よ！」

急に元氣よく、いそいそ内玄関を上りながら、万里子の度外れな上つ調子な声が訊く。

「茶の間？お居間？」

「お廊下の取着きのお座敷で御座います」

子供つたらしく、ベタバタ駆け出す愛児の足音を、早くも聞いて此方は、廊下の外迄出迎へ、両手を派出に拵けて、縁側の柱によつて立つて居た。

「母様！」

飛びつく迄もない、いきなり引き寄せ、しつかり抱いて、座敷につれて並んで坐つた。

「万里子は今迄、何処に行つてたの？」

「今迄きたやと、駅で待つてたの。母様のお帰り一生懸命、待つてたの。今度も、今度も〔3〕、また今度もね。随分頑張つて待つてたの」

顔をあげて、まともに見上げた万里子の瞳には、涙が一杯、今にもこぼれて落ちさうに、光つて見へた。

——今迄何処に行つて居ました？余りにも心無い言葉であつた。まるで紅玉を薄絹にくるんだやうに、ほんのり紅味のさした顔色が蒼いやうにも見える。可憐い口のおともない。今更ら頬つ辺にキスも氣恥かしい。たゞ其児の顔一面、なめてなめて、幾らなめてもなめ足りない、いぢらしさに、僅かに云つた。

「悪い母様ね」

「万里子、きたやの云ふ事聞かないで、もつと、もつと頑張るつもりだつたのよ」

「その万里子を待ちばせさせて、悪い母様。小池の伯母様と教会で御

一緒にね、お邸の自働車で、序に送つて頂いたの」

「きたやの云ふ事聞いて、万里子得ちんね。暗くまで頑張つてたら、大変ね」

「きたやも得ちんよ。いつ迄も万里子に頑張〔4〕られたら、きたやも泣いたわね」

「きたやの泣いたの、万里子のせいぢやないのよ。きたやはね、お汽車を見るときいつでも泣くの。お郷里へ行きたいつて」

「え？」

「きたやは如何して泣くの？」

「お手々をお眼々にやつてね、お指の先きで涙を拭いてるわ」

「如何してお汽車に乗りたいの？」

「駅まで行つて乗るんだわ」

「母様だつて、それ位解つてます。如何してお汽車に乗り度いのかう？」

「お切符を買つて、乗るんでせう」

「解らないのね。きたやは、お郷里へ行き度いつて、云つたのね」

「云つたわよ」

「如何してお郷里へ行き度いのか？」

「お汽車に乗つて行き度いのか？」

「お汽車に乗つて行かないで、如何するの？まさか、遠いお郷里へ、歩いて行けない位、〔5〕当り前ぢやないの。万里子の解らん坊主！母様は一人で考へます。好いから彼方で勝手に遊び、ねえ、早く！」

思ひも掛けぬ、突然な不機嫌に、万里子は如何して好いか、解らない。今にも泣きさうに、泣きべそかいて、うちうち起ち兼ねた。

「彼方でお遊びつてば！何をうちうちしてるのよう！誰か居ないこと？誰でも好いのよ。誰か来て！」

頻りと四辺を見廻して、呼んで見たが、生憎返事をする人の声も、姿も無い。自分で立つて、座敷の柱の下方に取りつけられた、呼鈴の

ボタンを、思ひ切り続けざまに、ヂヂヂヂヂ、ヂヂヂヂヂと矢鱈に押した。

あたふた廊下を素つ飛んで、頓驚な様子で現はれたのは、仲働きのうらやだ。

『おう、うらや。解らん坊主の此の人、彼方へ連れてつてよ。早くつてば！』

『は？』うらやは面喰つて、何が何だか解らない。

〔6〕『は？ぢやないわよ。うらやも案内、気が利かなすぎるわね。

見たら大抵解りさうなものだ。私がこんなに手古摺つてるの、この人なんだよ。さつさと彼方へ連れてつて、遊ばせれば、それで好いのよ。まだ解らない？』

『は。万里子様。うらやと彼方へ参りませう、何か好い事して遊びませう。お人形ごっこ、およばれごっこ？ね、ね』

『嫌！彼方へ行くの嫌！嫌だ、嫌だつてば！好いよ。幾らでもお引つ張り、うらやの意地悪！泣くよ、泣いちやうよ、嫌ん！ワアワア』
大変な騒ぎになったもんだ。

『うらや、おかまひで無い。勝手におさせ。万里子は何時迄でも、此処にさうして居て、動いちやいけ無い。其代り、母様の方で他のお部屋へ行きます』

ひよいと身軽に部屋から外へ、長い廊下をツイ、ツイ音もなく歩いて行く、夫人の額に、青い絹糸の、かなり太い丸紐ほどの筋が浮んで、きつと結んだ口元が、びくりびくり〔7〕動く度、両方の眼の下の顔面神経までが、小刻みに□□した。

お廊下の端の西洋館は、万里子の父様の書齋になつて居る。戸をノックして、いきなり駆け込み、何も彼もぶちまけて、口惜し涙にむせんで泣いた。たつたそれだけで、不思議と癩癩の虫が落ち着いたか、どつと一度に、胸一杯モヤモヤつかへた溜飲もさがり、あれほどいきり立つた気分が、すっかりほぐれて行つた。

万里子の父様は、此の石門の主人で、英語の教授だ。

『何だ、そんなの何でもないさ。誰でもやり勝ちな疑問詞の問題から起つた、至極簡短な例題に過ぎないよ』

早速専門の英文法の説明で行つて、この難かしい問題を解決する、その例題として取り上げた。

『君だつて、高等女学校程度の英語の素養はある筈だ。これしきの例題位、すぐ解る』

〔8〕と本式の説明にかゝつた。

『HOWの意味は如何してだ。WHYの意味は何故さ。その日本語の、如何してなる言葉は、いつも定つて行動を意味する場合にのみ用ひられ、一方何故と云ふ言葉は、原因を意味する場合に使はれる。自然この二つは双方共、別々の疑問詞だ。而もそれを何故間違ひ勝ちなのか——と云ふのは地方によつて、この二つの言葉の意味を、一緒くたにごたまぜして、どんな場合にも、行動の意義を持つ処の、如何しての一点張りで押し通し、矢鱈如何して、如何してと、これを両方の疑問詞共通用語に、用ひたがる癖がある。特に或る地方では、当然何故の疑問詞によつて、訊かれなければならぬ疑問の場合、行動の疑問詞が、方言的に平気で使はれる。そこにこの間違ひの種がある——自家の母様もそれを屢々やつて居る。けだし幼いながら、□準語の本家本元、東京育ちの万里子には、母様の方言的如何しての疑問詞が、頓と通じる訳がない。〔9〕實際血を分けた肉親の、本当の母と娘でありながら、母様と同じ郷里に産れて、同じ土地の方言に馴染んで育たなかつた、それが、産れながらに、一生ついで廻る、万里子の悲しい宿世の因果とも云ふのだらう、余儀ない話さね』と句を切つて、更に云ふ。

『結局、母様の方言ごたまぜの疑問詞、如何してが、テツキリピンと、万里子の頭に受け入れられる訳がない。何故と訊かれる筈の処を、如何と、英語で訊かれたも同様だ。間違つかないで居られるもんか。自然如何してと訊かれたら、当然行動の答で行くね。次ぎから次ぎへ、矢継ぎ早やに行動の疑問詞、如何で訊かれて一々それに答へた

処を、イヤそれではない、もつとハツキリ、ちやんと云へど、それも矢張り行動の疑問詞、如何してを使つて訊かれる。彼様か此様か一生懸命、子供の智慧をありつたけ、絞れる限りしぼり抜いた揚句、やつと考へついた『切符を買つて乗るんでせう』のあの答と来たら、僕は実際ほ〔10〕ろりとしたね。これは父親の僕一人と限るまい。怖らくあのくだりを聞かされて、涙なしに居られるものが、何処にある。いちらしいぢやないか』

しんみり言葉を切つて、新らしく続けた。
『遮二無二眼ざす最後の返事をあせつて、又しても行動の疑問詞振りかざし、一気に打ち込む鋭い太刀先き、天懐□□の楯があつたらこそだ。ズバリと無邪気に受けとめた返事は如何だ！正に御名答だね。満天下に聞いて、誰が百パアセントの採点を否み得ようか、天晴及第、見事なものさ。ところが如何だ、処がだ。正面切つた母様の不機嫌と来た。呆れたらうね。まるで日本一不所存者の、だだつこ扱ひされて、いきなり何処かへ立ち退き命令だ。どぶつこ猫か、宿無し犬同様、人を呼んで、何処へでも持つてけだ。堪らないや。それが又常ふだん、威張つて無理がきくうらやだもの、きまりは悪し、むかむかして、意地でも動けるもんか、嫌ん、泣くよ、泣いち』

〔11〕うよワアワアの大騒ぎになるのも、当然だ』
『無理もないけど、万里子の意地つ張りつて、とても甚いのよ、御覧になつたら、屹度呆れてよ』

『だがね、どうせ宿世の因果といふ奴でね。君と万里子の一生一代ついで廻る悲しい運命さ。考へると困つたもんだよ』

『怖ろしい！何とかならないかしら？』

『此儘続けぬ手を打つより、どうにもなるまいね』

『その手つて、どんな手？』

『これつきり、こんな思ひを打ちきるだけの手だ。而も残念ながら僕には出来ない。当事者の君に嘆願する以外、どうにもならぬ』

『く〜』

『お国なまりと、きつぱり縁切つて、如何と何故を正確に、日本語で使つて、君と万里子と母娘につきまとふ、悲しい因果を、これきり綺麗に打ち切るやう、僕は心ぞ底から嘆願する。嘆願しないで居れない』

〔12〕 全く真面目に、両手をついて頭をさけた。

『何でせうねえ、まあ、そんな大袈裟なこと、呆れた人ね。ホホホ』
ミセスは軽く笑つたが、しんみりと染々云つた。

『可哀相な万里子、悪い母様！』

『つまりは、折角万里子と仲よしのきたやが、急におひまを申出て、郷里へ帰つて行つたら、如何しよう、その一途な心配から持ち上つた問題さ。きたやはまだ小娘だ。何と云つても、親の手を離れた初旅ではあり、お汽車を見れば、涙も出る。ほんの思郷病に過ぎないさ。年に一度、親兄弟の顔を見に、郷里に行かせると、斯様約束すれば、けるりと治るね。駅に行つて、汽車を見る眼は、自然と変るよ』
『全くよ、気がつかなくなつたわ、今夜にも、さう云つて約束しませう、ねえ』

〔13〕 『万里子も喜ぶ。君のノイローゼも起りつこなし。僕も助かる。ハツハツハツ』

〔二〕

此処東京市の郊外、東中野の高台、三千坪以上の、高等住宅地域でもつて、石門の植村さんで通る広大な門構えだ。花崗石の門柱に刻まれた『植村孝麿』は、一見公卿華族を連想する。前後左右、その悉くが、何れ劣らぬ有爵で揃つて居る。政界の名士。富豪の邸宅別荘。某財団週末倶楽部。某銀行行員慰安茶寮。某会社が特に社員の為め、その娯楽場として、建設した養園。等々、贅沢な構えの中に立ち交つて、一介の教員風情——と云つては、些か語弊に渡る嫌ひもあるが、質素で堅実そのもの、代表的存在を意味するやうな、教育家だの、駆け出しの学者位が、如何して生活し切れる土地柄ではない。

だから英文法の植村さんでもなし、一高の植村教授でもない。矢張り、新築当初から呼び馴れた『石門の植村さん』が、この邸の通り名だ。

「14」かと云つて、万更ら知られて居ない訳でもない。一昔前の新聞で見て知つて居たのを、忘れずに覚えて居る老人の談話で聞いたか、或は亦、久しい間終始、植村教授の著書ばかり——『英文法初歩入門』とか『心理学的英語研究』等々、主として高等学校生徒を対象とした、所謂教科書の参考書、或は受験問題の例題と云つたやうな種類のものを、好んで扱つて、まるで一手引き受けみたいな出版社、神田の文林堂が、印税のはんこつきに寄来した、店の若者のおしやべりから、だつたかも知れぬ。

『石門の植村さんで、は猫の後釜だ』とよ』

『は猫つて何だい？』

『止せやい！は猫はは猫さ。『我が輩は猫である』の、は猫ぢやないか——秋目さんが教授をよしてよ、新聞界に転向した、その後釜の一高教授さ。覚えとけ』

『フウン、うまくやつたナ。何時からだい』

『彼れ是れ、十年になるね』

「15」『怖ろしい旧聞で無いか』

『何云つてやがんでい。こん畜生！たつたの今、初耳の癖して、旧聞が聞いて呆れらい』

だが、うまくやつたナとは、如何にもうがつた言葉だ。

その頃、植村教授は洋行帰りの直後、神戸高商に勤めてゐたが、『アメリカ式英語』でもつて——本當に用へて役に立つ英語の、それでかなり評判の教授であつた。

折柄は猫の秋目さん、新聞転向に天降り事件突発。一高教授の椅子があいぢやつた。

同志社と云ひ慶応と云ひ、二つとも卒業はして居たが、どちらも私立の大学だから、いざ愈々履歴に書いて、官学方面に提出する段とも

なれば、とても心細い。世を挙げて官閥ならではその当時、所詮は私学の悲しさ。官閥最高学府の此の椅子が、望んで手に入るものではない。アメリカで学んだ大学が、一高の校長、古渡辺博士と同じ学閥だつた、それしきの縁故にすぎるとは、余程の心臓が必要「16」だ。何一つ噂さの種にもならないうち、神戸高商に居た筈の植村教授が、早くも一高教授の椅子に坐つて居たではないか。まさかと思つたものもない。アツと驚ろいて、これこそ学閥七不思議とばかり、色々世評の的にされたのも当然か。殊には植村教授は、やつと三十を出たばかりだ。単に年齢から云つても、あの有名な猫の後釜として、少々若過ぎた嫌ひがないとも限らない、やうにも見へた。

同窓同期の友人、同志社出の一人が云ふ。

『僕が最初に願つた終生の志望は、帝大教授だ。徒らに高望みしたばかりに、所謂盲者の垣のぞきで、手に取るどころか、一生遂に見る事の出来ない、志望を追ふて、今日まで生きて来た私学の僕だよ。官学も私学も少年の僕に何が解らう。精神的感化を第一に、飽くまで学校伝統の気風に重きを置いて、特に撰んで呉れた親父の律儀さを、尊敬こそすれ、斯くなり来つた今日様、毛頭恨みがましい慨念など、持つては居ない。だが併し、僕が「17」深くも心に抱いた、帝大教授の夢は、同志社入学の途端、早くも悉く崩壊されて居た訳だ。とも知らず僕は励んだ、たゞ□らに奮闘力戦、数々の功名を続けた。取りわけ卒業の日の晴れがましさ。人一倍の成績をかち得た誇りと、敢て人後に墜ちぬ自信に燃えて、いざとばかり求職の戦場に打つて出た——とまではよかつたが、涙ぐましい猛者振りも私学の楯では、如何にも防ぎがつかぬ。到る処撃退のされ通しでね。遂には刀折れ矢已も尽きた。故郷の親父に電報して、軍資調達のため、なげなしの山林を売らせる程、強い心臓の持ち主でない僕だ。万事休して、暫し海路の和日を待ち、他方面に然るべき戦壱を求めて進軍するほか、どうする術もない。而もその戦壱を何処に求めるか、実に容易ならざる問題だ。笑はないで呉れ玉へ、此の窮地に所して、

僕には猶最も慎重に考へなければならぬ条件がある。志望の城から、決して遠きに居てはならぬ事、自分の柄でないから嫌だとか〔18〕、どうにも気が重いなどと、我儘は一切通用しないが、たゞ何時か又駆け戻り得る近道を進むに限る——と覚悟の瞬間、脳裏に閃めいたのが、誰あろう、新聞界切つての第一人者、K新聞社長益富露峰先生だ。

それを今まで気づかずに居たとは、□□千万、全然忘れてゝも居たやうに、思ひ出さうとしなかつた、いつそ不思議で堪らない。母校同志社とは創立以来、深い関係の露峰先生、本当にほうけて忘れて居た訳ではなかつた。空しく撃退の痛手に、腹かき切るか、二進も三進もならぬ敗残の僕、未練なやうだが、再起重來を期し、染々気づいたこの木蔭。何処にこれ以上立ち寄るゆかりがあらうかと、早速訪ねて拾つて頂いた上、段々引き上げられて、与へられた椅子が、K新聞編輯局長の現職だ。他所眼には定めし、結構な身分だと思はれ、少なくとも破格な出世だに、噂さはきつと飛んでゐる。百も承知だ。元來好き好んで飛び込んだ訳ではなく、柄にもない僕〔19〕が編輯局長と來てるんだ。先生御庇護の下にあればこそとは云へ、よくも此処まで馳上つて來られたものだ、うたゝ人生不可解を叫ばずには居られない。だが思ふに、僕の出世も、先以つて此処らあたりが、行き止りの打ち切りだ。イヤイヤ誤解されては困る。敢て云ふ。僕はこれ以上、ハツキリ云つて、編輯局長以上の出世を望み、その行き詰りを嘆き、悲しんで居る訳ではない。実のところ、僕のこの心胸たるや、実に悲痛極らないものがある。感慨無量死ぬにも死ねない。これ鼓張に非ずだ。全く本当だ。この儘人生の幕を打ち切る、それが如何にも残念で堪らない。先生の御庇護に対し、かりそめにも口にすべきでない。してまた云へた義理でもないが、僕には如何あつても、此の儘では成仏し切れない悩みがある。

と云ふのは他でもない。あの純情可憐な少年の日、最初に懸けた終生の志望が、いまだにもつて忘れられない。昼間のうちは、忙し

〔20〕 いまぎれに、如何にか過して居るが、夜の夢では帝大教授の文字が、早速眼前にちらついて來る。それも特筆大書の、馬鹿大きな奴が、ぶんらり、ぶんらり眼の前にぶらさがるんだ。堪らんね。眠て居て見へる訳がない。さう云へばさうだが、所謂心眼といふ奴だ。その証拠に、真昼間昼寝もしてゐない時やつて來て、ぶんらり、ぶんらりやつて見せる。つまり俗に云ふ『未練が残る』それだ。

時々振つたニュースが飛ぶと、世間が騒ぐ。例のは猫の新聞界天降り的事件も、その一例だ。否、一例どころか、大々的センセイシヨンの見本と云ふのが、一番適切に響いて聞へる。何がさて、帝大教授を終生の志望にかけて、夢にまであこがれ抜く。それは単に僕一人と限らない。永い年月苦しみ悩んだ亡者共が、世間にはうちや居る。その亡者共を尻目にかけて、衆人環視の真つた中に、ポンとおつぼる教授の椅子だ。而も日本最高学府と、立派に銘柄打つた帝大と一高と、二つ揃〔21〕つて押つぼられるんだよ。どぎもを抜かれないうで居られるか、勿体ない！ 氣でも狂つたか、教授の精神状態まで氣遣ふ騒ぎだ。ところが当の教授、正氣も正氣、涼しい顔で澄して御座る。と云ふのも、元來歴きとした官閥家の坊つちやんだ。一高から帝大と順に進んで、恩賜の銀時計ともなると、忽ち海外留学の辞令が下りて、英国劍橋大学の免状が官費で手に入る。帰朝を待つて据つて居たのが、おつぼり投げの椅子さね。云ふならば、よゝうに餅の皮をむく。結構けの字の御身分だから出来るんだ。私学の亡者共、呆れて眼をむく以外芸もない。

だが、何でも彼でも御意の俵、御無理御最も、程度によりけりだね、無理が通れば道理が引込むばかりでも、余り曲がな過ぎる。結局あきて、うんざり、氣分が腐る。昔からよく見る御曹子型だ。癪にさわつて癪が立つ。氣難しくとんがつて、理由もなく八つ当る。周囲がハラハラ御機嫌とりに、博士号を贈〔22〕呈すると、けんもほろゝな権幕で、散々つばらごてた揚句に、蹴飛ばした——この大馬鹿のとんちきめ、馬鹿土にされて堪るか。馬鹿にするない！

大見え切つたこの御託宣の□□が、ウンと大きく一般大衆に受けて、どえらく喰らせた。鳴りもやまない拍手かつさいと云ふ奴だ。頻りに人気をあほつて、囃し立てる大騒ぎだ。豪気な人気だ。著書の売れること、売れること、まるで羽が生へて飛んで行くみたいに売れるんだ。印税の利率の高い事、曾て聞いた事もない。古い言葉で表現すると洛陽の紙価をして為めに高からしめ、著者の名声をして、あまねく天下に、鳴り轟かせた事になるんだが、それではどうも僕等の胸に、ピンと来ない。アツと云ふまに、出版界切つてのベスト、セイラアになつてしまった。日本最高学府の教授だといふ、それだけで、結構立派に光つた背景の上に、今度又更らに、滅法素敵もなく光り輝やく、大きな金鉈の星が添へ〔23〕られた。ピカピカとその素晴らしいこと、実に夥しい。満天下尽く眼を見張つて、文字通り仰天した。

この背景の金鉈！当の教授だつて、ごてぬが損だ位なところで、この大した意外な効果には呆れたらう。

まさかこいつで、味をしめた訳でもあるまいが、教授の年棒が何程か、ホンの煙草銭位と云へないにしろ、ピイヤマネイ程にも当らぬ、僅かなものだ。まるきり棒に振つたところで、将来背景に用ひる売名の利得は莫大だ。これを考慮に入れない馬鹿があらうか。斯ろ万事成算あつての上だ。久米の仙人が間違つて落ちた、あの浮き雲なんぞ、万に一つ踏むもんか。調査の上にも調査した、特別準備の雲を足場に天降れば、世間でよく危つかしいもの、例に使ふ『清水の舞台から飛び降りる』例題の必要なし。下界の新聞社では双手を挙げて待機の歓迎だ。

問題はたゞ一つ、うるさがたの世論だが、〔24〕外遊で外せば造作は無い。地球上至るところ、人喰ひ人種の蛮地以外、英語の通じぬ国はない。我が輩は何処へでも行ける。断じて日常茶飯に困りつこない——

秋目先生の心胸を見抜くと、まことに愉快な話だ。専売特許はな

いが、僕だつて多少英語の持ち合せもある。日常茶飯の言葉なら、まさか終日英語で義論する訳でもあるまい。人喰ひ人の蛮地でない限り、同じ人間を相手だもの、取つて喰はれる心配なしだ。よんど困れば、手真似で行く。手真似と表情で必らず解らせるだけの、自信がある。確呼たる自信をもつて、折角大いに力んだが、ホイ、これはしたり、猫が居ない。坊つちゃんもなし、虞美人草も、生憎庭に咲かせてない。消気ちやつたね、実に。

だがこれは、当の秋目さんだつて未定の外遊だ。勝手に憶測した宝島を追つて、夢中になつて居ただけだ、なんだラチも無い。消気込みは、至極簡短に打ち切れた。

〔25〕

(三)

K新聞編集局長は語る

『其処へ突如報じられた、一高教授椅子投げの実行だ。兼て予期して居た僕も、どきもを抜かれたね。』

のみならずさ、その椅子に坐っているのが、誰あらう、現在の植村教授と来た。呆れざるを得んぢやないか。僕は全く呆然自失、イヤ、余りの事に気が遠くなつて、危く卒倒しさうになつた。そして矢鱈怒鳴つて、あくたれた。

『植村の馬鹿野郎め！何を血迷つて出て来やがった。だから貴様は大馬鹿だ』

『何を苦しんで事もあらうに、猫の後釜ねらやがった。この薄野呂のうるたへものめ。世間知らずにも程があらう』

『単に学力の問題ぢやないぞ。それしきの事知らないで、如何なるもんか、間抜けの馬鹿の薄野呂め、猫の後釜がつとまる柄かよ。口』

『26』惜しからうが、貴様につとまる芸当ぢやない。馬鹿め』
『僕に一言、何故相談しなかつた？たつたの一言、何故僕に相談しなかつた？馬鹿者め。だから貴様は馬鹿も馬鹿も、日本一の大馬鹿だ』

つて事よ。情けないやい。話にならん大馬鹿者奴！」

『僕はそいつが情けない。情けなくつて、腹が立つ。ヤイ植村の馬鹿野郎。水臭いぞ、余りだぞ』

『僕に一言相談したら、僕は断じて来させやしなかつた。今更ら云つても迫着かないが、鏡を見たら大抵解るだらう。蛮風の一高に、貴様の顔は気風に合わない、貴公子面と来てるんだ。おまけに孝磨なんて、お公卿のやうな、名前が第一不向きだぞ。そいつも気づかず、世間知らずの薄野呂め、何を血迷つて出て来やがった。とつとと素つこめ、役者が違はい。此の間抜けのうろたへ者め、貴様が出る幕かよ！』

〔27〕どんなにあくたれたつて、今となつてはもう、後の祭り、所詮どうにもなる話ではない。素つこめ、引込め、何故素つ込まないと怒鳴つて、素込ませるにしろ、素込むにしろ、一旦公然と発表された今日、然るべき場面がなくては、矢鱈簡短に引込みのつくものではない。散々地だら踏んで、果てしてもない口惜し涙に、むせんで泣いた。如何にも斯様にも業腹で堪らない。何も彼もむしやくしやして、如何しようもない気持ちの、やり場に困つた、一人で焦れて焦れて焦れまくり、大いに憤慨しては憤慨し、自然と気の鎮るまで憤慨し続けて居るより他、自分で如何する術もない

『馬鹿め、これからどんな苦勞が待つてるか、そいつも解らないで、呆れた馬鹿だ』

その直ぐ傍から、思はずには居られない。

『可哀想に、彼奴、碌すつぽ、東京の学生生活も知らないんだ。同志社出で慶大に入つたんだから、卒業まで一学期か、いや、かりに〔28〕二学期かゝつたとした処で、せいゝ半年とちよいとだらう。如何したつて一年はかゝらない。そのたつたの一年、東京に居たつて何が解る？慶大は元来富豪も財界の大家系だ。その富豪の御曹子揃ひの慶大に居て、向ヶ丘のデカンシヨ氣質は、全然、気風が反対だ、可哀想によ。植村の奴、どうせいちぢめられるに、定つてるん

だ』

ふと報導の新聞にのせられた、新任教授の写真に眼をやるや、咄嗟に又候、怒鳴つてうろたへた。

『へん、此奴め！お公卿が火事に会やしまいし、斯う落ちついてられて堪るか。よせやい、こん畜生！第一そのネクタイが成つてないぞ！当世流行のアメリカ式、本家本元のハイカラで御座い、が聞いて呆れら、貴様そのハイカラで、正気で、本気で、向ヶ丘の大蛮カラを、向うに廻して、つとまる気かつてんだ、べら棒め、呆れた狂人め、馬鹿の狂人と来たら、助からない。斯様しちや居られない』

〔29〕居ても立つても居られない。矢鱈せき込んだが、結局途方に暮れた。急いで事をしそんじる、急げば廻れの謔もある。強て心を落ちつけて、ゆつくり思案の腕組みと来た。

と云ふのも、あの有名な小説坊つちやんは、秋目さんその人をモデルださうな。新任教師が赴任当初、泣いても笑つても吃度一度は持たねばならぬ経験だ。意地悪な同僚、生意気な生徒に、こつぴどくいぢめ抜かれ、散々な眼に会はされた後、やつと務めて一人前の教師になれる。云ひかえれば、基督教徒に於ける、洗礼の式だと云ふ。坊つちやんの小説に書いてあるのが本当なら、いつそ余儀ない受難とあきらめて、暫く経過を見ながら、好適な処置をとる手もある。古い諺にも可愛い児には旅をさせろとか。

斯様は思つたが、又気が揉める。小説坊つちやんの背景は、何処か四国あたりの県立で、中学程度の学校だが、此方はかりにも、兼々自ら以て誇る、官閥最高学府を背景の、本〔30〕格的檜舞台ではないか、一高名有ての蛮風猛者と取り組んでの、大立ち廻りだ。油断はならぬ。どんな拍子で、どんな大事にならないとも限らない。うつかり、泣いても足りない敗北をとらせてなるものか、抜き打ちに大刀浴せて、パツサリ卑怯なのが無きにもあらず、危い、危い。何と云つても血気にはやる若武者揃ひだ。前後左右の思慮分別をなくし勝ちなのが、兎角若人の常だと云ふ。教授何ぞや、左様な分別にこだはり、後には退

けまい。殊にはその教授は新任の悲しさ、武器として使へるのは、僅かに堪忍の一手あるのみ。これ以外何等秘術の手も知らぬ。と知つて、みくびつて、その虚を以て、むんづと取り組まれたが最後、どう勝ち目もない。音に名高い一高の制裁場、谷中の森にひき摺られ、活殺自在、思ふ存分のおしおきに、感念の眼を閉ぢる以外、どうなるものか。戦場の露と消へればまだしも、勇ましの戦死を自ら口目のよすがともなる。散々擲擻されて、「31」不具者となり、或は又打ち処次第では、内臓の大出血を起し、全身のどの内臓であれ、一生闘病に了る故障ともなる。而も所謂打たれ損の、死ぬ者貧乏の幕と来るから堪らぬ。歴きとした秋目門下は、年輩の若さ如何を問はず、花も実もある文壇の面々だ。かりにも暴挙乱行の対象として、考慮する必要は絶対無用。たゞ其処に怖るべきは群集心理だ。現に猫の大衆ファンが、無慮無限にゐて、はやくもその盛んな声援を送るため、頻りに待期して居るではないか。

一刻の猶予もあらぬ。全く僕は総身に慄を感じて、忠言しないで居られなかつた。

『君、悪くすると血へどのだよ、食ふに困つた身分ぢやなし、何を苦んで、生命がけの辛抱だ。間違間違して居る場合ぢやない。早いと辞表を出せ。尻尾を捲いて逃げ出すと思へば、口惜しからう。如何にもならぬ気持ちも解る。残念でもあらうが、君子危きに近よらずさ。自分からおん出で行けば、それ「32」で可いんだ。何が卑怯なもんか。身をもつて逃れる、つまりは気の持ちやう一つだ』
毎日のやうについて廻つて、必死と口説いたが、柳に風と受け流されて、たよりない事夥だしい。

『オイ君。僕は解らない。君は一体全体、何の爲めに丸持ちの親父を、あゝして郷里に控えて居るんだい。まさか飾り物のつもりぢやなからう。オイ、僕はもう黙つて此儘見とられない。敢て云ふ。何故君は今一度、アメリカに遊学と来ないんだい？アメリカに渡つて、より以上の実力と、より以上の背景を勝ち得て、再度重来、必ず勝つ

の意欲を見せない？何故其処に■■■の努力を致さない？三十そこそこの若さでもつて、何たる腰抜けだ。齒痒いつたらしいぢやないか。それも大事にされてりや、自ら話は又別さ。何も周章で、出るにも及ぶまい。出て行けがしにされてまで、未練を残す椅子でもなからう。うつかりすると、いつ叩き殺されるか知れない処に、「33」何時迄屁つぴり腰で、かぢり着いて居る馬鹿があるもんか。ヤイ、磨さん。冠のかけ時忘れて如何する？磨さんだけに見つともないを通り越し、状態無いや、そんな意生地なしの醜態つて、見たくもないの骨頂だ。血へどを吐いてからぢや、追着かないぞ。とつと出て行け、何故出ない？飽くまで頑張り、血へどを吐いて見せる気か、へん、そんなもの誰が見てやるもんか。見たくないから、泣きの涙で云つてらい。吐くなら吐きやがれ、勝手に吐いて自分で見やがれ、へん何を云やがる。友人で居て居て、平氣の平左で見られるかい。そんなもの、平氣で見られる奴があつたら、それこそ、余つ程場違ひ者の、間違ひ者と来らい、意生地なし！』
本ものゝ血へどこそ吐かなかつたが、血へどを吐いて死ぬ思ひを、三度と五度は屹度して居るに相違ない。石の上にも三年とは、いかにもよく云つた。一昔と云へば十年だ。思へば遠い昔になつて、辛抱のし甲斐は確かにあ「34」つた。

今だから話せば長い事ながら位で、笑つて話も出来るがね、猫の事からヴウヴウ怒つて、いがみ合ひ、絶交したのも度々だ。一度つきりの筈の絶交に、度々もないもんだが、親友同士は格別さ。

『何だと？も一度云つて見な。何故僕が卑怯者の、がんどどきだ。訳を云へ』

『焼豆腐の名前に恥じて、正面切つては出て来れない。形を変へて出て来た、卑怯者のがんどどき、さ』

『今少し言葉を添へないと、解らぬ洒落らしいね』

『感の悪い奴にはさうかも知れん、わかりのお早い君に、ピンと来ない筈はなからう。念の爲め云つて聞かすから、耳をほちつて、よ

うく聞け——いらんお世話の焼豆腐、その名に恥じて、正面切つては出て来れない。形を変へて出て来た、卑怯者のがんとときさ」

『何云つてやがんでい、この胡瓜野郎奴！』

〔35〕『何故僕を胡瓜と云ふ、訳を聞こう』

『訳を聞きときや、辞書をひけ、辞書にはチヤンと書いてある、英語の洒落だと書いてある。そいつを知らずに、如何するく、一高の教授がつとまるかい。デツカンシヨ！』

『辞書をひくまでもない。涼しい顔の胡瓜だが、何でそいつが、僕の代名詞だい。それを云へ』

『孝麿などとお公卿のやうな名をつけて——と来らい。涼しい顔の胡瓜！一高に不向きと知らないね。デツカンシヨ！』

『では僕も云つてやる。此の金魚野郎奴！』

『何が金魚野郎だ、訳を云へ』

『晴着姿で綺麗に見へて、食へない奴は金魚で御座い。金魚の刺身は生命がけ、めつたに喰へぬ毒だとさ』

『云ひも云つたり。そんなら、此方は云つてやる。田舎の町の本町通り。如何だい。痛いか』

『意味を云へ、訳を聞かう』

〔36〕『訳を聞きときや云つてもやるが、変に曲つてくねつてばかり、田舎の本町、ちつとも條が通らない。へん、根性曲りは大嫌ひ』

『何だと、べら棒め。勝知しないぞ！』

『勝知しなけりや、勝手にしろい。糞でも喰へだ、こん畜生！デツカンシヨ！』

『糞とは何だ、臭い臭いと思つて居たが、余り下等で、鼻持ちならん。臭い奴だと白状した以上、もう我慢がならん、寄りつくな』

『何を云やがる。この唐変木の根生曲り奴。叩いて直らにや、此方の方でも用事は無い。二度とは来ないぞ、ベソかくな！』

何しろ一昔以前の若い同志。猫の問題で矢鱈気が立つて居る。少年時代から気心知つて、なまじ僕の終生の志望を知つて居るだけに、どう

も余計に始末が悪い。本気で忠告されても、やつかみ屋の出者張と、兎角ひがんだ根生が、心の底にきざして居る。此方は此方で、僕がこれ程忠告して居るのに、ひがんでばかり居やがつて、糞面白くもない。その口惜〔37〕しきで、胸の中は煮えくり返る。何だこのひが

んみん坊主の、根生曲りと、業腹まぎれに、あらん限りの口から出まかせ、猫でないから爪は立てぬが、云ひ度い放題、感情のひつかき合ひさ。ヴウヴウ喰つて、血みどろの大喧嘩だ。揚句の果てには、決つていつも絶交沙汰だが、何時とはなし、何方からともなく、寄つて居るから、不思議なものだ。

『世間ではよく、夫婦喧嘩は犬も喰はんと云ふ。猫の喧嘩は如何だ？』一番最初の絶交後、こんな端書を僕から出した。と早速端書で返事を呉れた。

『同じだよ、くだらんね』

『そんなくだらんもの、捨てたら如何だい？餓鬼が拾つて食ふかも知れん』

『さうだ。屹度食ふにきまつてる。文字通り餓鬼は餓鬼だよ。僕は捨てた。君も捨てたら知らせに來い。久し振りだね』

僕の方から折れて出た。そいつは少々照れくさかったが、『僕は捨てた』と、彼方が先き〔38〕に捨てちやつて、君も捨てたら知らせに來い』と来たんだ。あいこだと思つたね。それで一番おしまひの『久し振りだね』を読む段になると、嬉しくつて、懐しくつて、涙がボタボタ落ちて来る。大の男が状態ア無いやと。苦笑しながら顔一杯、手放して濡らして居るんだ。だから今でも忘れない。端書の文句がはつきり、記憶に残る。

二度目は端書もいらぬ。どちらが先きだと、こだわる事もない、堪らなくなつて逢ひ度くなれば、いきなり電話の授話器をとつて『君かい』と呼べば『僕だよ』と、たつた一言、声を聞いただけで、忽ちお互の気分は、あの少年の日に続く。別れるたんび、相手のよさが染々解る。どうにもよくて、あばたも口さ。今更ら切つて切られる関

係ではない。其の頃はめつたにやらないが、今後絶対にやらないとも限らない。そんな時、喧嘩の仲裁に入ったつもりか何かで、うつかり相手の欠点など、口走るべからず。後日とんでもない〔39〕馬鹿を見る事、受け合ひだ。

『兎もあれ植村一高教授の名も久しい現在、僕としてより以上の満足はない。だが其処に一抹の悲哀と云ふか、ウフフフ、可哀想なはこの子で御座いだ。僕はたつた一度で結構。血へどを吐く思ひがしたかつた』

K新聞編集局長の淋しい眼元に、涙のあとがにじんで見へた。

(四)

駅前の三嶋屋さんは、此処いら界隈たつた一軒きりの、荒物雑貨店だ。お邸揃ひの土地柄だけに、贅澤な金額の品は、天下の三越を筆頭に、洋酒の鶴屋、お菓子の勝本、風月、方々名代のお店が、必死の競争で直接、都心から御注文の配達をやる。自然高価な品物は置いても無駄だ、その代り庶民一般日常に必要な品と来たら、何一つ無いものはない。味噌醤油は勿論、威勢の好い四斗樽が、年中テンと控へて、キューと一杯、拵呑みの客を待〔40〕つて居る。

天井から吊したやかんと馬尻、昆布、干口の束がさがつた其下には、瀬戸の小火鉢、行火に槽。今戸焼きの口口と、輪釜にかけた土鍋のお釜。炭俵をどえらく積んで重ねた傍に、洗濯鹽、アルミの洗面器も忘れて居ない。十能に火消し壺。火箸は勿論、火吹きだるまに、物干し用の松柴ピン。茶碗小鉢、瀬戸物なら何でも御座れだが、専門の葉茶屋で使ふ、大きな茶壺の前に、お盆にのせたおつな番茶道具が、馬鹿に人目をひく。三つ輪石鹼、毛の髪油。朴菌の足駄がとりわけ多く、小倉の鼻緒がいつでも、ドツサリ投げ出され、御履物の部の、殆んど全部を占領して居るのも、土地柄で仕方があるまい。

豆腐に昆弱油揚げ、干鰯に切り昆布、安くて持ちの好い野菜は大抵、残らず揃へた中に、一段引き立つ鮮かなトマト、季節によつて、品に

多少の異は見るが、ビールの突き出しに桜桃の箱入。枝豆の束、西洋草苺、大粒の〔41〕むきそらまめ。幾らお邸だつて、時には不意打ちの来客もあらう。火急の間に合はせに、これだけあれば、ちよいと云ひ分のあらう筈がない、何を間誤つて周章てるものか。

こまかいものでは、消毒の割箸、いぼたの妻揚子、背中を掻くのに入用な孫の手。蒲団のとち針に、青色のとち糸も序に用意した。折角探して駆けつけたお客に、無駄足ふませぬ奉仕が、人気を呼んで、しつきり無しに客が出入る。

それにまた、東京からの帰り道、思はぬ雨に降られた場合、電車を降りて直ぐだと云ふ、眼鼻の距離にある場所の地の利にもよるが、駆け込みさへすれば、急場しのぎの雨傘も売つて居る。自宅まで濡れ行く心配なし、万事仕入れに気を配つて、商買上手だ。その上二三度来た事のある顧客だと見ると、売り物の雨傘を買ひ度いと云ひ出す迄もない。いきなり拵げて、店の名入りの貸用傘をさしかける、お内儀のその心意気が気に入つて、ど〔42〕うにも忘れられないと、来る。林檎の空箱を椅子代りの定連は、又しても空箱を増して一杯だ。傍にはお茶受け用の菓子箱が幾つも並んで、四角なガラス瓶の外から、腰のあたりを海苔で巻いた、見る眼も小意気な、菊兄い好みの塩煎餅が、キビキビ一杯、肩を揃へて元気に見へた。お好み次第でラムネも抜ける、仕掛けに出来ては居たが、定連の誰かゞ一人、箱の上に乗せられた板ガラスの蓋をはねあげ、饅頭か何か頬張ると、早速お内儀が見つけて、早いとこ抜かからず、無料の麦茶を汲んで差し出す。何処まで続くか果てしてもない、世間話の頃合ひを見ながら器用に合ひ槌を打つ。ソツの無い行き方で、何時か定連の仲間に割り込み、万刃なく愛想を振りまく。

『ところで一同、あの石門に口の入つた話、知つてるかい？』

定連の一人が、大きな声で切り出した途端、買物に入つて来た美子は、アツと驚いて〔43〕、声を立てかけ、危く息を呑んだが、早鐘のやうな、胸の鼓動が中々甚い。

『些少とも知らなんだね』

『フーン、何時だい？』

定連の二人が一時に周章で聞いた。美子が小耳を立て、知りたがるのもそれなのだ。

『何を盗られた？』

『宵かい、暁方かい？』

『朝だか昼間だか、何時盗られたものか、皆目、見当がつかねいでよ、駐在所も弱り抜いてらい』

『何しろ、あれだけの邸だ。大したものを盗られたね？』

『左様よ。大した金だが、唯たの一品さ。その余のものは、何も持ってかかった。』

『其奴はよかつた。その一品でもつて、大した金つて、何だい一体？』
『極つてらい、あの赤銅造りの雨受け口さ。而も両側の口口まで、揃つた其奴を盗られてるんだ、金額も金額だが、大した口よ』

『44』『フーン、其奴を又、今度も盗られたのかい？呆れたね』

『とほけるない！其奴を又、今度盗られたのかい？呆れたねと来やがる。知るもんか、今度のは知つての通り、臨時凌ぎの竹口だ。そんな安物をねらつて持つてく、間抜けな口が何処に居る。俺の話は此前盗られた、あの赤銅口に極つてらい。一度盗られた其奴をよ、今度又盗られたかつて、盗られるにも何にも、石門に無い口だ。今度又盗られる訳が無い。ふざけた野郎だ。呆れたのは此方の事だよ』
『だつて君、あの石門に口の入つた話、知つてるかつて、いきなり来たらう』

『左様さ。耳をほちつて聞く事だ。俺は最初から云つてるよ——あの石門に口の入つた話、知つてるかい。幾ら云つても同様だ。入つた話しだよ。入つたの知つてるかと、云つた覚へは無い』

さうと解つて、美子はホツとした。兄の邸〔45〕の石門で、口を盗られたその話なら、もう彼れは一ヶ月も、その余も以前の話だもの。だが全く何時盗られたものだから、いまだに以て頓と解らない。そ

の為に解決されない程、残されたその話とは、如何にも凝つた戯言だと、苦笑した。

『やられた！うまく擔ぎやがつたナ』

『戯言ぢやない。何を俺が擔げるもんかよ。人聞きの悪い事云ひつこなし。おまけに、頂頭に大かい声でよ、盗られたと押冠せて、怒鳴られた日にア、勘弁ならん。まるで俺が盗んで擔いだみたいな、云ひ草で無いか。よせやい、第一あれだけ重い赤銅の口がよ、俺一人で、如何擔げるかつてんだ。擔がれたと思つた奴こそ、本当の解らず屋さ、ハツハツハツ、この頭抜きの薄馬鹿奴！』

『何云つてやがんでい。ヘン、余り重過ぎて、そんなの戯言にもなん無い。聞いているだけで齒が浮いてよ、此方の肩まで、ウズウズ痛んで来らい。ハツハツハツ』

『46』『ワツハツハツ。だがよ、あれだけ重い赤銅口を、朝だか昼間だか乃至は何日の頃だか、とんと知らずに居てゐてさ、やつと此の頃の土砂降り雨で、気がつきましたちや、受け取れ無いな』

『幾らお邸の有閑だつて、余り呑氣の度が過ぎらい』

『全く如何かと思ふね。石門の有閑の歩好きと来たら、まるで毎日だぜ』

『些少と左巻きで無いかい？』

『およしよ。そんなの』

三嶋屋さんのお内儀が横から云つた。

『あれで毎日のお出掛けぢやないんだよ。一週一度日を定めて、下町から長唄の名取りの師匠が、チャンと伺つて終日、おけいこをおつけするんだよ』

『フーン、左様かい。余程、年期が入つてらしいね』

『師匠の話で聞いたんだけど、中年から初めたには、かなりお筋がよくて、怖ろしい身の〔47〕入れ方でもつて、珍らしく御熱心だとき』

『お内儀の前だがよ。其奴アいけねい。終日、チントンシヤンを、馬鹿熱心にやつて、如何なるもんか、家の中に居たつて、まるで居な

いも同様だい。否、程悪いやね。些少とやそつと、表の方で、ガチャ、ガチャやられたつて、解りつこ無い、邸は広しき。へん」

「フーン、道理でね。駐在所も云つてたが、つつきり真昼間の仕事さ。而も公然ものよ。梯をかけて、外してよ。相棒があるとにらんでるんだ」

「梯を擔いだ職人なら、三人と五人並んで、通りかゝりの眼についた処で、石門のお出入り位で、表の石門から威張つて入れる。出る時だつてその意気さ。仕事の最中、運悪く邸の者に見つかつたにしろ、」

「お郷里の大旦那に、以前から頼まれやして、入梅雨前に、わざとやつて参じやした」で、けりがつかい。かりに若し、あの有閑が生憎家に居たつて、女中が取りつぐね。

「48」アラ左様、風月の何かで、お茶をお出し」てな寸法さ。おまけに間がよかつたら、

「大きに御苦勞様」で、御寸志の議儀一封と来らい」

「違え無い。呑気なもんよ」

「それつくり又出歩きの、口の事なんか、忘れてしまつて、思ひ出しもしないわよ、で澄してるんだ、豪気なもんよ」

「あの有閑、此前駐在所に訊かれてさ。ふだん口の事なんか、思つても見ないから、解んないわよつて、本当の事云つたとさ、ハツハツハ」

「処で左様は問屋が御すまい。お郷里の大旦那は、旦那の方の親御だつてぢやないか、するていと舅だよ。何時まで臨時の竹口で誤間化し切れるもんかよ。案外思案投首、このところ頭痛鉢巻の、大弱りだらうさ」

「頭痛鉢巻の大弱りなら、邸の中でウンウン唸つてさうなもんだが、今日も綺麗な服装して、お出歩き」

「49」「やけのやん八、如何なるもんか、いつそやけ糞気分の出歩きだよ」

「思案投首、頭痛鉢巻つてのは、此方らのやり繰り世帯だよ、何の赤銅口位で、弱るも困るもんか。あの石門の夫人と来たら、驚ろいちゃいけない。御自分の小切手一枚で片附くよ。旦那に相談もへちまもいるんぢやない。植村直美と、御自分で一筆やれば、三越から万端、石門の支払一切通用なんだよ。嘘言ふもんか、現に此の三嶋屋の店で頂いて居るのが、『植村直美』の小切手さ」

「呆れたね」

「豪気な話さね。余程実家が、素晴らしいんだねえ」

「御実家の御当主がね。長者議員だとさ。石門の夫人の一番上の姉さんに、入り智して来た従兄弟ださうだが、出京のたんび、麴町の大した旅館の、讃岐屋さんが定宿でさ。而も二階の八畳間を二つともぶつ通して、年がら年中借り切つてるんだとよ。おまけに御家老

「50」格の御家来が一人、屹度お伴について来るんだよ。ねえ」

「結構な御身分だね。年がら年中威張つて、今日は三越、明日は帝劇、唱の文句通り出歩き廻つてられるのも、道理さね」

この頃移転して来たばかりで、平常着のめいせんものに、紫朱子の帯では、まさか石門に縁故の者とは気がつくまい。此の土地へ転して来たお蔭で、兄の邸の噂さも、この耳に直接入る訳合ひだ。何彼の参考にと思つて、そつと小耳を傾げる気になつた。人の口には戸が閉て居ると、嫂の評判のよろしくない事夥しい。話のくぎりの津度、石門の有閑の上か下には、何かしら変な形容詞がついて廻る。どうせ人の話に尾ひれはつきものだ。転がる度に雪だるま同様、大きくなつて行くのが人の噂さだ。昔からのきまりだと知つては居るが、思はず知らず赫として、真紅な顔にならずに居られ「51」ない。それが自分でチャント解るから、猶更ら堪らなく気恥かしい。講師師見て来たやうな嘘言をつきなら、虚言だと思つて聞くから、大した苦にもなるまいが、本当を土台に段々大きな話になつて、虚言より甚い。成る程郷里では、相当の名望家だが所詮は一介の田舎紳士に過ぎない。それ

を何ぞや、先祖代々永代無限に伝はる、金のなる木の苗木でも、拵へて置いて貰つてあるやうに、大したものには噂されたり、嫂の実家にしろ、まさか金むくの茶釜が、家地廻り一杯、どつちやら、転がつて居るでもあるまい。大名暮らしそのけの噂には、閉口頓首だ。曰く畳表が百畳。曰く寶石ぢらしの帯衣装。そのどれもが事実を根拠だけに、或る程度の辛抱はしたけれど、次ぎから次ぎへ、きりもない定連の世間話に美子は到底最後まで、聞いては居られなかつた。

折角買物の注文に入つたけれど、配達を頼むには、まだ顔馴染のなにお帳面のおとくい〔52〕だ、此方の住居と姓名を告げねばならぬ。まさかとは思ふが、今のうちまだそれとハッキリ、氣附かれないに越

した事はない。

美子はそつと、三嶋屋さんの店を出た。

付記 本研究は科研費(26370238)助成による成果の一部である。

本資料の公開をご許可くださった著作権継承者の方々、閲覧の便宜をおはかりいただいた府中市上下歴史文化資料館にお礼申し上げます。

(Reprint) Nagayo Michiyo “Dekkansho” (1)

Nobuko ARIMOTO
Taiki ITAKURA
Katalin DALMI
Keita MANDA
Saya KUMAO

Nagayo Michiyo (formerly Okada Michiyo) (1885–1968) is a female writer from Hiroshima, known as the model of Tayama Katai’s novel, “Futon”. However, Michiyo also wrote novels, girls’ novels, herself as well as translating several works from the end of the Meiji era through to the Taisho period.

This paper presents a transcription of the manuscript “Dekkansho”, an unpublished novel from the author’s late years. This is a story about Michiyo’s brother and the successor of Natsume Sōseki as a professor at “The First Higher School, Japan”, Okada Jitsumaro and his family.

The first half of the novel is published in this issue, while the latter half with notes and comments are planned to be published in the next issue.